

## 赤いランドセル

島田 淳子



### 幼い日

私は昭和八年六月、木曾谷の真ん中にある谷底の町、木曾福島に生まれ、そこに育った。父は山脈を一つ隔てた伊那の人で、実家の家業である染め物屋の木曾営業所主任兼小使いみたいなことをしてい

た。和服地の染めを依頼されると、反物を持って伊那へ行くのであるが、だいたいにおいて暇で、時折り私に木で玩具を作ってくれたりした。母はいつもせつせと反物の洗い張りをしていた。日本手拭いを姉さんかぶりにした割烹着姿の母が、庭いっぱい広げた布に向かって伸子シシを一つ一つ棘シしている姿

は、母に対する私の原風景である。

私は予定より二か月も早く生まれた未熟児だった  
それで、何かと言えば熱を出して寝込んだそうだ。  
その当時のおおかたの家がそうであったように、わ  
が家の暖房は、気温が氷点下になる冬季でもこたつ  
だけであり、血の巡りが悪い私は冬になると手に霜  
焼けができた。そのうえそれはいつも膿んでしま  
うのであった。両手が見えなくなる程、包帯でぐる  
ぐる巻きにされ、毎日の取り替えが痛かった記憶があ  
る。五歳になつて妹が生まれるまでは一人っ子で、  
毎日一人で本を読んだり、絵を描いていたそうであ  
る。熱を出す以外にはとくに親を困らせたこともな  
かったようで、何をしてものろいいため息をつかれ  
た以外にあまり叱られた記憶もない。口数も少な  
く、青白くて生気のない子どもだったようである。  
そんなわけで幼児期に友達と遊んだ記憶もないし、  
もちろん幼稚園にも行かなかつた。

### 小学校入学を前に

初めての集団生活は小学校からである。その前後  
のことは、数十年経った今もなお鮮やかに心に残つ  
ている。日一日と迫つて来る入学式を前に、私は初  
めての集団生活に対する不安と期待でいっぱいのも  
日を送っていた。セーラー服ができ、草履袋がで  
き、日毎に緊張が高まるのを感じながら、私はラン  
ドセルがまだないことに秘かに心を痛めていた。今  
日は買ってきてくれるか、今日は買ってきてくれる  
かと秘かに期待し、毎日秘かに失望していた。そし  
て失望がそろそろ限界に達しそうになった入学式の  
三日前、ランドセルが届いた。赤いランドセルであ  
る。蓋を開けると、裏は白い布張りになっていたの  
であるが、惜しいかな、布の一部が破れており、真  
ん中あたりに数センチ程度の穴が開いていた。「こ  
だけちよつと残念だけど良いランドセルだね」と  
努めて何気なく話す父親の気弱そうな表情が、今も

はつきりと記憶に残っている。

### 愛されている確信

その時どんな言葉で応答をしたかは覚えていない。ただ私はこんな穴など全然気にならない、というのを両親に分かってもらわなくてはと必死だった。その気持ちを覚えている。

今思い出しても、我ながらいじらしいと思ってしまうのであるが、あの時なぜそれ程まで必死になったのであろうか。それは、私が父母に絶対的に愛されているとの確信があったこと、したがってこれが両親にとつて精いっぱいであると判断したこと、それならば両親を悲しませてはいけなと思ったことから生じたと考えられる。

子どもというものは想像以上に大人の状態を理解しているものであると思う。そして親またはそれに代わる人から十二分に愛されていると実感できることは、子どもが健やかに成長するために空気のような

に必要な不可欠なもので、この点がしっかりしていれば、かなりの逆境にあつても真つ直ぐに育つものであるというのが、私の体験から来るささやかな保育論である。

### 生活の激変

小学校に入学してまもなく私の生活は一変する。数年後に日本人の生活を極限まで追い詰めることになる戦争の影が、木曾の谷でささやかに暮らす親子にも忍び寄ってきたのである。

母の実家は、同じ木曾福島で木曾の糰味噌を製造販売する味噌屋であった。その中心にいたのは母の



父と弟である。母の弟が突如軍隊に取られ、後を追うように父親が若くして急逝してしまった。どういふ話し合いがなされたかは知る由もないが、程なく私達一家は母の実家へ移った。そこには曾祖母、祖母、二人の叔母、数人の従業員がいた。しかも叔母たちの一人は私より二つ年上で、もう一人は一つ年下であった。二人ともとても元気が良かった。

親子だけの静かな生活から、十人以上の大家族への突然の激変であった。

### 味噌屋の毎日

味噌噌造りの人びとの動きは活発で、いつも忙しそうであった。朝早くから米を一斗ずつ洗う洗米機のしやりしやりした音が聞こえ、まもなく米を蒸し上げる甘い匂いが家中にただよってくる。蒸し上がった米を大きな筵の上に広げて糍を加え、みんなで筵を囲んで手でごしごしと混ぜ合わせる。それを一升ずつ糍蓋に入れて薄く伸ばし、厚い壁の糍室に

入れる。そうこうするうちに大豆が茹で上がり、それを挽き肉機みたいなもので潰す。これに糍を加えてこね、直径二十センチもあるうかという味噌玉を皆で作って、並べるのである。それは活気に満ちた風景であった。

台所もまたせわしげであった。大きな鉄の釜に厚い木の蓋をして、その上に大きな石の重しをおき、母がご飯を炊いている。竈に薪を入れ、火吹き竹に思いつきり息を吹き込んでゐる。丸く膨らんだ母の頬がこれ以上赤くなれないほど赤くなったころ、火がパッと燃え上がり、火勢は次第に強まってくる。

囲炉裏には黒光りした自在鍵が釣り下がっており、そこに掛けられた大きな鉄鍋のなかで味噌汁が煮えている。背の丈以上もある樽の中には一年中食べるのに十分な木曾菜が漬け込まれていて、毎朝山のようにならば食卓に登場した。

そこへ人びとがどっと集まってきて、食事が始まる。ひとりひとりが各人の箱膳を持っていて、その

なかから食器を出して、自分で盛りつけて食べる。  
それは活気とスピードに満ちた情景であった。

### 人間関係への試練

このような生活のなかで私を秘かに悩ませたのは祖母の態度である。私は母の十八歳の時の子であり、年回りから言うところだと叔母たちと三人姉妹のようであった。周りの人達はそのように扱った。しかし祖母は違った。心のなかに何か私に対する冷たいものがあった。それが私の心を冷え冷えとさせるのであった。何とか暖かく接して欲しいものといくぶん努力はしてみたが、どうすることもできなかった。

祖母は、五歳下の私の妹を初孫であるかのように溺愛した。妹は私と正反対で、体も丈夫で自己主張も強く、行動に創意工夫があり、誰でもつい愛したくなるような資質を備えていたから無理もない部分もあったが、後になって、よくひねくれないで育ってくれたと母が述懐したところを見ると、この差別

はかなり露骨であったようである。

今になって見ると、祖母の気持ち的理解できる。私の存在そのものが、幼くして父親を亡くした自分の娘たちへの不憫さを増したのであろう。年端もゆかぬうちに戦場に引っぱり出された一人息子への思いもあったと思う。後年、道で傷痍軍人に出会ったことがある。薄汚れた白い着物にカーキ色の軍帽をかぶり、物乞いをするその人を見た時、祖母の目にと涙が浮かび、日頃の祖母からは信じられないほどのお金を差し出した。その時初めて私は祖母の心の奥底を覗いた気がし、初めて祖母に人間味を感じたのであった。



ともあれこの時期、私は戦争が終わったら、そして叔父が帰ってきたら、また元のような平和な暮らしが出来る、それまでの辛抱だと自分に言い聞かせ、小学校時代を過したのであった。そしてまた、黙って耐えられたのも、両親に絶対的に愛されていくとの確信があったからである。

## 終戦

昭和二十年、私が六年生の八月。戦争は終わった。叔父さんが帰ってくる！心躍らせた私は、そのころは四人になっていた弟妹を近くに連れ出した。「戦争は終わった。叔父さんが帰ってくる。これからは家族水入らずで暮らすのだ。貧しいから、欲しいものも買えないかもしれない。でも家族水入らずで暮らすのだから、我慢しようね」。

六年間堪え忍んだ思いを一気に吐き出すかのように、日ごろの私とは思えない情熱的な調子で語った私であった。しかし、今考えると当然のことではあ

るが、弟妹の誰一人として私の言葉を理解しなかった。

こうして私の小学生時代は終わった。あれほどまでに私が帰還を待ちわびていた叔父は、私達の世代なら誰でも知っているインパール作戦で戦病死していた。

## 終わりに

執筆の機会を頂いたおかげで、久しぶりに思い出した数十年前。それは長い歴史から見ればまばたき一つ位にしか相当しないものである。それなのにあのころの私たちの生活を彩っていた生活用品のほとんどのものは姿を消し、生活の風景が一変していることに改めて驚きを禁じえない。一方で、愛すること、はぐくみ育てることの重要性は、時代を越えて変わらぬ本質的な意味を持つことを再認識した次第である。

(お茶の水女子大学)